

1 国 語 科

羽場邦子・曾根照三・福島靖之

1. 豊かな感性を育む国語科の学習指導

(1) 自己を高める評価力の育成から感性を育む国語科の学習指導へ

これまで、自己を高める評価力の育成に努めてきた。自己を高める評価力とは、「めあてを持ち学習している自分を見つめ、自分のよさに気づきながら振り返り、さらに、次のめあてに向かって高まろうとする力」であると考え。言い換えると、一人一人が話題や題材に主体的にかかわり、思考力を高め想像力を豊かにしながら、言葉で表現したり理解したりする学習である。これらの学習から、言語による学習活動の楽しさを味わい、自ら高まろうとする子どもを育てたいと考えた。実践を通して、めあてを持ち、自分の友達よさに気づきながら、学習について振り返る活動の成果を得た。さらに、主体的な学習を振り返り、自己の高まりを自覚していくために、一人一人の気づきや感じ方を大切にする学習の場が必要であると考え。

- ① 題材にかかわるとき、自分の心で気づき感じながら想像し、理解や表現をすることが、より確かなめあてを持つことになり、学びの振り返りができると考える。
- ② これまでも、「自分のよさや友達よさを認め、互いに向上していることを、ともに喜びあえる受容的・支持的学級風土作り」を目指してきた。さらに、一人一人が存在感を持ち、自分を表現できる学級づくりをしていく。
- ③ 一人一人の考えを受け止め共感的に理解し、支援するためには、子どもを内面からとらえていくことが求められる。

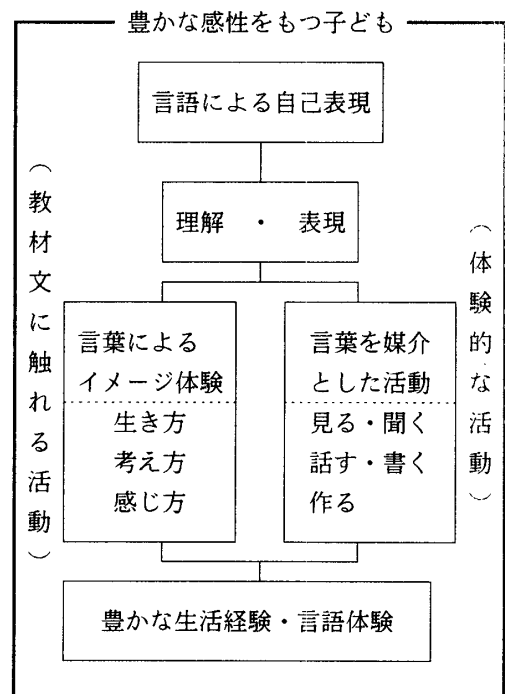
(2) 感性を育む国語科学習

国語科が目指す『豊かな感性をもつ子ども』とは、

- ☺ 言葉自体の持つおもしろさに気づく子
- ☺ 登場人物に同化し、お話の世界に入り込む楽しさを味わう子
- ☺ 登場人物の生き方や考え方を知り、その価値に触れる子
- ☺ 自分なりに生き生きと表現する子
- ☺ 友達の表現のよさに気づく子

等である。学習の場では、次に述べる点を重視する。

- 教材と出会った時の驚きや感動を大切にする。
- 五感を働かせて、経験を生かして想像する。
- 音声や文章、体で表現する。
- 言語感覚を磨く。



子ども達が気づき感じながら、話したり聞いたり読んだり書いたりする言語活動を行う時、心の対話が生じる。そのとき、子ども達は楽しさを味わい、主体的な学習に向かう。楽しさは、表面的なおもしろさではなく自分の内面から発する欲求が実現したときに感じるものである。一人一人の

気づきや感じ方は異なり、多様である。それらを受け止め、認める教師の支援も問われる。

国語科におけるイメージ体験は、豊かな生活経験に支えられている。学習の場でも、できるだけ体を使っての活動を取り入れ、体験を通して言葉の学習を行っていきたい。「これからの国語科の教育では、子ども一人一人がよさや可能性を生かしながら、進んで教材とかかわり、自ら考えたり判断したり表現したりする学習活動を通して言葉による表現力や理解力を身に付ける必要がある」（「新しい学力観に立つ国語科の学習指導の創造」文部省）と述べられている。気づいたり感じたりしながら、言葉にこだわり言葉を大切にすることを子どもを目指し、子どもの心に響く学習の場を設定したい。

2 感性を育む授業づくり

(1) 豊かな感性を育むための条件

国語科の学習において豊かな感性を育む条件とは、どのようなものであろうか。いくつかのポイントになることがあるように思われる。その条件を次のように考える。

- ① 子ども一人一人が、未知の世界を知り、人生のドラマに出会うなど感動を伴う題材を選ぶ。
- ② 作品の一語、一音、一句にも作者の灯がともっている。子ども一人一人の気づきや感じ方を表現する場を設定し、作者との豊かな対話を授業構成の基盤とする。
- ③ 実物に触れたり、実際に体験したことを表現できる学習の場を設定する。
- ④ 子ども一人一人が自分自身のめあて意識を持った学習を進めていくことが何より大切である。そのため、初発の感想や課題作りを大切にされた授業展開を工夫する。
- ⑤ 学習したことを振り返る場を設定し、教師と子ども、そして子ども同士の人間的なふれあいや学び合いを大切にする。

(2) 豊かな感性を育む教師の支援

子ども一人一人の気づきや感じ方を受け止めそのよさを見つけ、認める評価のあり方を考えていくことが、子どもたちの感性を育むことにつながる。そのための支援として次のことがあげられる。

- ・うなづく
- ・たずねる
- ・励ます
- ・ほめる
- ・言葉を添える
- ・意見を出す
- ・学習ノートに朱書きを入れる

(3) 感性を育むための学習過程及び教師の支援

学習過程（1単位時間）

